



## 丸辰商店

### 南河原スリッパの伝統を次世代に①



#### 会社プロフィール

【代 表】和泉 文夫

【事業内容】スリッパ製造業

【所 在 地】南河原 580—1

昭和38年の創業以来62年の歴史に幕を下ろし、今月12月末でスリッパ製造業に終止符を打つことを決めた丸辰商店。今月は南河原の伝統産業、スリッパ産業を長年牽引してきた同商店を紹介しします。

同商店代表の和泉文夫さんは昭和54年に急逝した先代の後を引き継ぎ、スリッパ製造業を始めました。最盛期には地区内に40軒近くの業者があり、昭和55(1980)年ごろに南河原スリッパは生産量日本一、全国生産量の7割を占めるほどに成長しました。

「私のモノづくりは直接消費者に販売するものではないため、問屋さんなどからの情報収集を欠かさず、その声をスリッパ作りにかかしてきた」と語る和泉さん。わずか7人程の少ない職人で消費者のニーズに応える製品を作り続けてきました。しかし、時代の流れとともにスリッパ産業は安価な海外製品の登場に押され、徐々に衰退していきま

す。こうした中、平成29(2017)年に南河原スリッパの伝統を後世に残すため、「南河原スリッパプロジェクト」が立ち上がり、これまではなかった新たなデザインのスリッパが登場。和泉さんはその商品開発に携わる中で「左右違う柄のスリッパを自分が好きなように選んで履くなど、従来のスリッパにはないアイデアを受け入れることも必要」とこれまでの意識を変えることの必要性を語ります。

地場産業の復興に積極的に参加してきた丸辰商店ですが、後継者がいないことなどを背景に廃業することを決めました。その一方で、同商店の技術や地域産業の伝統を守り、次世代につなげようとす

※このコーナーで紹介する会社を募集しています。  
特色ある業務を行っている会社の情報を広報広聴課(内線318)までお寄せください。

## 俳句壇

ぎょうだ はいだん

#### 俳句応募方法

一人3句以内。住所・氏名ふりがな・電話番号を明記の上、はがきまたは封書で広報広聴課まで。※毎月末日必着  
なお、「一部添削して掲載する場合がありますが、不要であれば「添削不要」と記載してください。

#### 老松のどつしりとある良夜かな

忍 大澤 由子

【句評】良夜とは十五夜、十三夜の満月の夜のことである。樹齢を重ねた松の大樹が月光の下に見事な枝ぶりを誇っている光景は美に感動的である。研ぎ澄まされた静寂の中で老松の生命感が浮き彫りとなる。一句である。長く舞踊の世界で培ってきた感性の成せる業といえるだろう。ちなみに今年の十五夜は10月、十三夜は11月でいつになく遅いものであった。

#### 一葉落つ青き虚空は音も無く

門井町 塚原 武夫

【句評】一葉落つとは舞い落ちる一枚の桐の葉のことである。秋の澄み渡る空から大きな桐の葉が一枚ふわりと落ちてくる様は優雅で風情がある。瞬の自然の営みを捉えた一句で、俳句の本道である自然詠の佳句といえる。近年の俳句界では客観写生という伝統がやや軽んじられているようで寂しい思いもあるが、これも時代の流れなのかもしれない。

#### 警策の響く堂内秋深し

持田 小倉 繁三

【句評】警策とは禅寺で坐禅を組む時、眠気や情気を払うために打つ四尺ほどの扁平な板のことである。坐禅を組み瞑想にふける中、時折びしつと警策の音が響く。澄んだ堂内では思わず身の引き締まる思いがするだろう。人間は本来弱い生き物である。こうした精神修養を積むことも生きていく上では大事なことがある。緊張感のある一句である。

#### 綱雲広き世間を龜歩む

渡柳 大西 道子

野仏の空を自在に赤とんぼ  
古墳今一山として冬に入る  
一輪のばら一陣の風と和す  
ものの影畳に伸びて冬近し  
たつぷりの柚子と戯る一人風呂  
空き缶を弄ぶ風冬隣

緑町 松林 真弓  
門井町 宮田 淑尚  
長野 牧 努  
棚田町 川鍋 幽覚  
下忍 荒井 王子  
佐間 西岡 備中  
(三沢一水選評)

#### 新年!本の福袋

- ▶期 間 令和8年1月4日(日)~12日(月)
- ▶内 容 中身が分からない本の福袋(3冊入り)を貸し出します。
- ▶配 布 数 【大人向け】30セット、【未就学児・小学校低学年向け】20セット、【小学校中学年・高学年向け】10セット ※なくなり次第終了
- ▶そ の 他 貸出期間は通常通り

#### 11月1日から図書館入口返却用ブックポストは開館中閉鎖しています

返却する際は直接返却カウンターまでお越しください。夜間や休館日などの閉館中は今までどおり利用できます。なお、12月28日(日)午後3時~令和8年1月4日(日)正午は年末年始のため閉館中であっても閉鎖します。※JR行田駅観光案内所の返却用ブックポストは年末年始以外にご利用できます。

#### [第12回行田市図書館を使った調べる学習コンクール]の受賞者が決定しました

応募作品全22作品を審査した結果、次の5作品が賞に輝きました。優良賞の2作品は、公益財団法人図書館振興財団主催の全国コンクールへ出展します。

- ▶優 良 賞 ・井上 はるかさん(泉小学校2年)「ようかい発見大作戦!!~どこに行けばようかいに会える?~」
- ・杉崎 春瑠さん(泉小学校6年)「あの時ばくの体の中で何が起きていた?~ミクロの世界をのぞいてみよう~」
- ▶奨 励 賞 ・野口 葵音さん(西小学校2年)「かいけつ?うんちのひみつ」
- ・長谷 恵里佳さん(泉小学校3年)「紙のれきしについて」
- ・栗本 壮さん(太田小学校6年)「本田宗一郎~戦後の日本を支えた人~」

#### バリアフリー特別映画会

- ▶日 時 令和8年1月12日(月)午後1時30分(午後1時10分開場)
- ▶場 所 「みらい」映像ホール
- ▶作 品 名 「お終活再春!人生ラプソディ」(上映時間118分)
- ▶定 員 70人(先着順)

## 行田歴史系 381

資料がかたる行田の歴史

81

### 阿部忠秋の自筆書状

寛永16(1639)年から忍藩主を勤めた阿部忠秋は、三代将軍徳川家光から四代家綱にかけて32年もの間、老中として幕府の屋台骨を支えました。老中として預かる職務のため、一年を通して江戸に滞在し、参勤交代を行いません。国元の藩政は忠秋の指示を得ながら家老たちが担っていたと思われます。

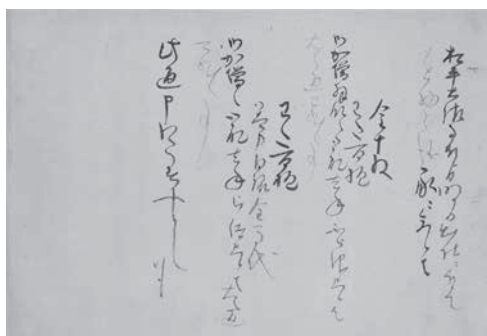
老中の勤務場所は江戸城の本丸御殿で、書記に当たる右筆などの役人が仕えていました。一方で、忠秋の重臣たちも私設秘書のような立場で老中の職務を支えて

おり、忠秋は家臣に幕政に関する指示も手紙で伝えていました。その一人が平田弾右衛門重政です。

平田は忠秋の父である阿部忠吉の代から阿部家に仕え、忠秋が寛永12(1635)年に壬生藩主になった際家老になりました。その後も加増を重ね、寛文2(1662)年には2000石となりました。平田の下には、忠秋から送られた幕政・藩政に関する指示書が多数残されていました。平田は寛文6(1666)年に忠秋からの書状など121通を4巻、忠秋の養子・正能の書状28通を1巻の巻子に仕立て、忠秋の4巻を子どもたちの新左衛門、治部右衛門、恒屋甚兵衛、甲斐吉右衛門へ1巻ずつ、正能の1巻を新左衛門に与えました。そのうち、治部右衛門に与えられた巻子が今回紹介する資料で、忠秋の自筆書状30通が収められています。

書状の内容を概観すると、將軍からの指示を受けての大名家への下賜品の段取りや、大名家から將軍家への進物の対応、將軍生母の葬儀、大名家間の交際などさまざまですが、老中の実務に関することも多く含まれています。老中御用部屋にいる忠秋が認めた指示書が江戸藩邸にいる弾右衛門の元に届けられ、実行されていたのでしよう。忠秋の老中の職務の実態を知る上でも貴重な史料となっています。

(郷土博物館 鈴木紀三雄)



忠秋公御自筆之御書  
(郷土博物館蔵)

